編集後記

令和 2 年は不穏な空気の中で明け、学期の始まるころから感染拡大が本格化し、社会が動揺するなか、授業の遠隔化、対面実習の限定再開、さらには講義の原則ハイブリッド化と、目まぐるしく推移した一年であった。

このコロナ禍に対する本学の対応の総括にはまだ時間を要するであろう。しかしながら正課の遠隔実施については、いち早くモデルを示せたと言えるのではないか。4 月には全遠隔の方針が固まり、1~2 週間程度の遅延でほぼすべての授業がスタートし、実験実習も一部を遠隔で行いえたのは、これまでの e ラーニングによるノウハウの蓄積と衝に当たった教職員の努力も当然ながら、全教職員が比較的スムーズに新しい教育環境に適応できたことが大きかったかと思う。現場の重視がここへきて生かされたと考える次第である。

衣替えした紀要は 2 号目である。例年開催している CIF (Chitose International Forum on Science and Engineering) が延期になったが、代わりに FMC2021 が宮永副学長をはじめとする実行委員の努力によって、完全遠隔で開催された。幸い今号に報告を掲載できたのでご覧いただきたい。全遠隔開催の是非はひとまず措くとして、居ながらにして遠地のイベントに参加できる意義は小さくないと思う。今回の成功は次回の CIF に向けて大いに参考になろう。

今号からは大学院の国際化という目標への一歩として修士論文の英文要旨を本紀要に掲載することとなった。令和 2 年度分として 13 件の修士論文が提出されたが、そのうち 4 編の要旨が掲載された。ただし博士論文とは異なり、必ずしも外部公開を前提とはしていないため掲載は任意となっている。見送った分については、他の機会に別の形で本紀要に現れることを期待している。なお、博士論文についてはその要旨と全文が同じ本学のリポジトリから順次公開されるのでそちらをご参照いただきたい。

ナノテク事業も新たなフェーズに移ろうとしている。今後ますます誌面を賑わわせることと期待している。

（YK 生）

編集委員

山中 明生
宮永 喜一
谷尾 宣久
吉本 直人
曽我 聡起
大越 研人
大河内 佳浩
川辺 豊　（幹事）

編集庶務担当

仲俣 里美

公立千歳科学技術大学紀要　第 2 巻　第 1 号

令和 3 年 3 月 12 日発行　通巻 2 号

編集　　公立千歳科学技術大学紀要編集委員会
発行者　公立千歳科学技術大学
〒066-8655 北海道千歳市美々758-65
電　話　　0123-27-6014